寄　書　　岩崎提案を読んで

岩崎提案とは本誌第48巻第1号 p. 52～53に登載された岩崎敏夫氏：「土木工学改名への一提案――構造工学」のことである。文中には「土木工学」の名称変更に関する意見が述べられており，筆者はいろいろの方面から検討した結果「構造工学」という名称を提唱している。　**【編集部】**

藤　田　周　造

土木という言葉は古く支那にて用いられ万里の長城などのことを大いに土木を興し，云々と表現している。わが国へこの言葉が渡来したのもそうとう古いことであるらしい。古い辞典によると「土木工事とは家屋，灯台，堤防，道路，鉄道，橋梁，隧道，運河等，すべて木材，鉄材，土石などを使用して構成する工事である」となっている。すなわち使用する材料から由来する名称であることは疑う余地はない。しかし，この辞典にもすでに土，木以外に鉄材を使用することをふくめているし，近来は土，木，鉄以外の材料も多く使用するようになってきたから，土木という言葉が少し不適当ではないかという議論が起こるのは無理もない話である。

しかし，わが国では古くからこの言葉を用い，明治維新以後も官立大学専門学校に，土木工学科があり，過去において内務省には土木局があり，現在でも府県には土木部かあり，そして私どもは土木学会の会員であって，一向差し支えがないように思われるが，時々改名の提案が出るのは，土木という文字からくる感じがよくないからではあるまいか。

土方，土百姓，土芥，土豪劣紳，土下座，土左衛門，土匪，土賊，土壇場，等々と数えあげれば限りがないが，いずれもあまり好感の持てない字句である。筆者の老妻も縁談相手が土木屋ときいて，一瞬応諾をためらったそうである。彼女は未来の良人が，半ズボンに巻脚絆で地下足袋姿の日にやけた風采の上らぬ男であることを懸念したそうである。閑話休題

しからば，どう改名したらよろしいか，岩崎教授は一構造工学一がよいではないかと提案された。結構なご提案であると思う。そのほか過去において，社会工学，文化工学，建設工学などの提案があったと記憶するが，もう一つ私が長年ひそかに出るべく期待していて，いまだ提案されないものがあるので，ここに禿筆を振う次第である。

土木工学，土木技師はそれぞれ Civil Engineering, Civil Engineer と英訳されているのが普通のように考えられている。土木学会ももちろんこの考えから Japan Society of Civil Engineers と名乗っておられる。一向差し支えはない。しかし，これが唯一無二の英語ではない。

筆者は1929年に海外旅行をしたが，そのとき貰った passport に私の肩書は土木技師となっており，その英訳は Expert of public works, 仏訳は Expert de travaux publics で，英仏はまったく同じである。現在はどちらか知らぬが，当時，日本の外務省は土木技師，すなわち Expert of public works と解釈していたことは事実である。そこで今ここで Civil, Public, Expert, Engineer などの意味をイギリスで発行した辞典で調べて見ると，つぎのようにある。

Civil とは relating to a community or people, as citizens and subjects of a state; Political, as apposed to criminal; lay, as apposed to ecclesiastical; intestine, as apposed to foreign; municipal, commercial, legislative, &c., as apposed to military; well regulated, apposed to rude and barbarous; civilized; polite; courteous.

Civil の定義は，社会あるいは州の市民および被統治者のような一般人；刑法上の罪人と対蹠的な政治（国事）犯人；聖職者と対蹠的な俗人；国外と対蹠的な国内；軍と対蹠的な市政，商業，立法等；無礼乱暴および野蛮と対蹠的によく調整のとれた；文明な；ていねいな；礼儀正しい，とある。

Public とは pertaining to a nation, state, or community; extending to a whole people; circulating among all classes; open to all; notorious; regarding the good of the community; open to common use.

Public の定義は，国家，州あるいは社会に関する；全民衆にわたる；全階級に流通する；すべてに開放されてる；周知の；社会の善人；共用に開放されてる，とある。

Expert とは laught by study and practisc; having familiar knowledge; having a facility of operation or performance from practise; skillful; dexte-

rous : one specially qualified by study and practise in any department of science or art.

Expert の定義は，研究と実地とによって教えられる；熟知の知識を有する；実地から操作あるいは履行の方を有する；熟練な；器用な；科学あるいは芸術の任意の部門における研究と実地とで特に資格のついた者，とある。

Engineer とは one who Constructs Engine; the manager of an engine; one who versed in and who practises engineering; a person skilled in mathematics and mechanics, who forms plans of works for effence or defence, and marks out the ground for fortifications [Military engineering]; one who employed in delineating plans, and superintending the construction of public works (Civil engineering)

Engineer の定義は，機関を建造する者；機関の監督者；工学に精通した者および工学を実地に習得した者；数学と力学とに熟練し，攻撃と防衛とに対する工事計画を樹て，要塞の地割をする人（軍事工学）；計画の輪郭を画き公共建設工事（土木工学）を監督支配するのに使用されるもの，とある。

これらから考えると，土木技師は civil engineer より，expert of public works のほうが better であるように思われる。したがって土木学会は Society of Experts of Public Works のほうがよいと思われるがどうであろうか。そして土木工学は公共工学としたらと提案する次第である。土木技師も公共工師とか公共技師としたらと思う。筆者は，自説を強く主張する考えは毛頭ない。ただ一つの案として，土木工学を公共工学としたらと思うだけである。このような問題は練達堪能の士によって慎重審議されたうえ，決定すべきものと思う。

［筆者：正員　社団法人 日本開発技術協会専務理事］

注：本文中の英文和訳は編集部で行ないました。

(1963. 1. 8・受付)

藤　山　正　光

1. 過去，幾年月にわたり，現場，研究技術者の間で論議されてきたこの問題に対して，岩崎博士のご提案は，多くの賛意を得るものと思います。そこには，なんら疑義をはさむ余地はありませんが，いささか，あの提案を出された動機に不明の点があると思い，ここに，質問したいのであります。

2. なるほど，土木工学の概念が，一般には間違って解釈され「具体的に土木工学のための優秀な人材の確保に影響を与え，土木技術者の職場をゆがめ，土木技術者の優秀な業績を不当にほかの分野の業績であるかのようにとられるのであり，このようなことが土木工学や，土木技術の進歩発展に悪い影響を与えつつある」と断言されるのは，たしかに，すべて間違いであるとはいえないだろうし，そのような現象は，皆感じていることでしょう。しかし，だからといって，土木工学なる名称を改正する理由には，まったくならず，土木技術というものの本質は，そんなところにはないと信じるものです。なるほど，大衆受けのする美しい名称は，われわれの気持を満足させ，土木技術者志望の学生が，増えるかも知れません。しかし，現在，諸矛盾は，単に，そのようなことで解決するものでは，決してないように思われるのです。この点については，いろいろと見方はあると思うのですが，もろもろの弊害の原因は，過去の，そして，現在でも残存する土木技術の疎外という点にあると思われます。すなわち，問題点は，土木工学の表意的な漢語云々の問題ではなく，土木技術が社会的に，土木技術本来の目的に使用されなかった，ということだろうと思われます。土木技術が，一般から正当に評価されぬ，という感想もそこから生じるものであり「…普請」から「一万円落札」，「政治駅」などにいたる過去の事がらが，一般にとっては，すっきりした土木技術というものを理解できなかった理由のひとつになるのではないでしょうか。最近に至り，総合開発などの土木技術の本来のあり方を示す面が，認識されるにつれ，現在の土木ブームに現象していると考えられるわけです。もっとも，土木ブームなるものの実体は，「技術」としてよりも，他面で理解されている向きもないではありませんが，このような考え方もあることを考慮するとき，現在せねばならぬことは，名称改正などのコップの中の嵐みたいなことをひき起こすのではなく，外側に向かってせねばならぬことがあると気付くわけであります。もちろん，改名それ自体大事なことでありましょう。その点に限れば，構造工学なる名称も，より適当でありましょう。しかし，われわれは，「土木工学」なる概念を明確化し，その面での論議をつくし，土木技術本来の目的をとりもどす努力をすることによってのみ，もろもろの弊害や誤解をとり除くことができるのではありますまいか。私のこの意見が，はたして正当なものかどうか，諸先生，先輩方のご批判を望みます。学生員として，差し出がましいのですが，あえてここに私見を述べる次第です。

［筆者：学生員　立命館大学理工学部　土木工学科］

(1963. 1. 13・記)